

## 講演

### 20 世紀のマルクス学の苦難と河上肇

摂南大学 八木紀一郎氏

#### 講師八木紀一郎氏紹介

中野 一新世話人代表

八木紀一郎さんは1947 昭和22)年に福岡県でお生まれになりました。東京大学文学部の農村社会学の大斗、福武直先生のゼミナールをされました。大学院時代は名古屋大学経済学研究所の平田清明先生の指導を受けられ、その後岡山大学に奉職されました。

それから京都大学経済学部に移られ、2010年に同大学を退職されました。その後摂南大学経済学部で教壇に立つておられ、現在同大学経済学部の学部長に就



いておられます。

今回私達の総会で講演をお願いしましたのは、会報でもご紹介しましたが、昨年7月に放映されたのNHKの番組「日本人は何を考えてきたのか」の連続シリーズの中で、大正時代の思想家として河上肇先生が取り上げられました。その折に、住谷一彦先生、海知義先生、内橋克人さんらとならんで八木さんがゲストとして参加されたからです。

八木さんの研究領域は経済学史で、経済理論学云、進化経済学会等で活躍なさっている方であり、主要著書には以下の作品があります。

『オーストラリア経済思想史研究 中欧帝国と経済学者』名古屋大学出版会、1988年

『フラインの経済思想 -メンガー兄弟から20世紀へ』ミネルヴァ書房、2004年

.....  
この会合には10年くらい前に参加させていただきましたが、それからながらくご無沙汰しておりました。京大におりました時、2006年に河上肇記念講演会を企画したことがあり、そのときにはこの会の方々

にもご参加いただきました。

今回中野先生から「今度の総会で話をするように」といわれまして、何を話すべきだろうかと考えましたが今年6月、ベルリンでマルクスに因んだ会合がありましたので、そのときに話したことをもとにすればなんとかなりそうだと思ってお引き受けいたしました。

その会合は、『マルクス・エンゲルス全集』(新版)に関わった会合です。これは1990年代に開始された出版企画ですが、それが1989年から90年にかけての変動の中で全面的に組織を再編することを余儀なくされました。それを経た上で継続された全集のうちマルクスの資本論に関するすべての原稿を集めた第2部が完結の見込みであるということが開かれた経済学史研究者の小さな会合でした。私はこの会合をきっかけに現在に至る20世紀のマルクス研究を振り返ってみようと思つて研究報告を行いましたので、今日はそれに多少日本との関わりを付け加えた形で話させていただきます。

## 1. 河上肇とマルクス学

タイトルに「20世紀のマルクス学の苦難と河上肇」

と書きましたが、河上肇が最後にたどりついたマルクス主義ということの世界のなかで考えてみたらどうなるのだろうか、それを現在の地点から考えてみたいと思つたのでございます。

「マルクス学」という言葉ですが、この会の世話人代表をされていた杉原四郎先生がよく、自分がやっているのはマルクス学である」と言われていたことを思い出します。外国ではマクシミリアン・リュベールという人がいて、この人はマルクスの原稿を単独でフランス語に訳して全集を出すということをやった人ですが、自分がやっている学問を「マルクス学」と位置づけておりました。

河上肇がマルクス学に出会ったのはどういう年代であろうかという点、『社会問題研究』という個人誌を出し始めた1919年から、捕えられて刑務所に入り、出所した1937年の間かと思ひます。

1905年の『社会主義評論』では、マルクスを社会主義の最大の理論家と呼んでいます。河上自身はマルクスの物質主義的な世界観ではなくてむしろ精神革命の立場でしたから、マルクス主義であつたわけではありませんし、『貧乏物語』もマルクス主義の立場で

書かれたものではありませんでした。

1919年の『社会問題研究』の創刊については、『宵叙伝』のなかで、おそらく真理の方向はここにありと、解らぬなりにマルクス主義を宣伝しようと思心したと書いているように、この頃に自分をマルクス学者として位置づけたのだと思います。

1937年6月に出獄する時に「これでマルクス学者としての私の生涯を閉じる。この一文は即ちその挽歌であり墓碑銘である」として自分で区切りをつけています。河上肇は『資本論』の翻訳等でマルクス学の研究を続けたという意向は持っていたようですが、警察当局がそれを許しませんでした。したがってマルクスの研究を深めていくことは1937年で断念したと言えます。もちろん彼の信念を維持し続けたということとは別のことでございます。

さらに詳しく考えて見ますと、旅の塵 はらひもあえぬ 我ながら また新たなる 旅に立つ哉」という有名な歌を詠んで本気でやらなければと思つたのは1924年だとも言っています。逮捕されて牢屋にはいますとマルクスの本も読めるわけではありませんので1933年までの10年くらいの期間ということ

になります。

この時期の河上肇は私自身にとっても、もともと興味のある時期ですし、多くの研究者が関心を持つ時期だと思えます。『貧乏物語』を自分で絶版にせざるを得ませんでしたし、榎田民蔵や福本和夫との論争があります。そして、資本論研究を本格的に開始して大学の授業の経済原論を次第に変えていって最後に資本論の体系に基づいた形での授業に変えていったのがこの時期です。また、ロシア革命についての探究も行なっています。

1928年に大学を去り、政治活動に参加し、1932年に共産党入党し1933年1月に逮捕されました。この過程は河上肇研究として最も深さの必要な時期であり、河上肇自身の苦悩と変化は日本思想史の中で重要な到達点であったと私は思います。しかし、これについては今日お話はいたしません。

同時期に世界ではどういうことがおきていたのか、河上がたどりついたマルクス学の世界でのあり方を考えてみたいということでございます。この時期にヨーロッパが主でアメリカは一部ですが、海外で起きていたことは、マルクスやエンゲルスの著作や行動を詳細

に研究することが学問として成り立った時期でありま  
す。

しかし、20世紀のマルクス学は成立するや否や、政  
治的圧力や外的な圧迫によって苦衷をなめざるを得ま  
せんでした。それが典型的に現れたのがマルクス学の  
一番の成果であるはずの、第一次の『マルクス・エン  
ゲルス全集』でした。マルクスやエンゲルスについ  
てのすべての資料を集めて二人の思想・理論の解釈に  
確かな文献的基礎を与えるのが学術的・批判的な『空  
集』の意義ですが、この『空集』の作業が始まったの  
が1920年代で、ちょうど河上がマルクス学に入っ  
た時代です。

第一次の『マルクス・エンゲルス全集』は1920  
年代にモクワでレーニンの指示の下にダビッド・リヤ  
ザノフというマルクス学者が中心となって刊行が開始  
されました。1931年にリヤザノフが逮捕され19  
38年に銃殺されるという状況の下で、一部の企画は  
細々と続けられ、他の一部は編修スタッフとともに肅  
清の波にのまれていったという過程がありました。

現在は、新しい『マルクス・エンゲルス全集』のプ  
ロジェクトが1989-90年の変化を越えた形で継

続しています。これについて現在に戻って考えましょ  
う。1920年代に開始されたものを『MEGA』、あ  
るいは『第一次のMEGA』と呼んでいます。『新MEGA』  
というのは1975年に、ソ連共産党と東ドイツの社  
会主義統一党中央委員会付属マルクス・レーニン主義  
研究所の共同の出版物として出発し、1989年から  
90年にその2つの研究所が危機に陥り中断の危機に  
さらされたわけです。これが1990年に再出発して  
現在では国際マルクス・エンゲルス財団 (IMES) のも  
とで刊行が続けられているものです。

この1990年の再出発に当たって『3つの原則』  
が確認されています。1つは非政治化、特に政党によ  
る影響を排除すること。2番目に、国際化、か  
つてのようにソ連と東ドイツの学者だけでなく西側に  
いる学者たちを加えて国際的な形で編纂を行なう。3  
番目に、高い学術性を維持する。この3つの原則に基  
づいて再出発したわけです。

なぜこのような当たり前ともいえる原則を確認し  
なければならなかったのでしょうか。『新MEGA』は確  
かに学術的な出版物ではありませんでしたが、ソ連共産党と  
東ドイツの社会主義統一党の付属研究所により出版さ

れ、それに対する人員・資金等もすべて国がつき込むという国家化されたプロジェクトでした。そうすると、かつてのマルクス学というのはソ連や東ドイツのようなイデオロギー国家を正当化するものに過ぎなかったのかという疑問が当然出てくるわけです。

この問題に関する最近の進展の主なことは、旧ソ連に所蔵されていた政治文書や手紙が明らかになってMIGAを中心としたマルクス学の実情が解かってきたことです。私はロシア語をやりませんし、モスクワのかつてのソ連のアーカイブの解明の作業をしていないので、ロシア語を介してそういった調査をやっている人の成果に依存せざるを得ません。とりわけ東北大学の大村泉さんとベルリンのロルフ・ヘッカー博士の仕事です。このお二人がモスクワのかつてのマルクス・レーニン主義研究所の文書を詳細に調査して、全集に關わるものを洗いざらい調査されています。

私はベルリンで行う研究報告のことを考えて、大村さんとヘッカーさんにお二人の研究成果を利用する許可を取らなければと思ひまして、ちょうど今年の3月に大村さんが仙台で『ドイツ・イデオロギー』の草稿の研究会をされた時にロルフ・ヘッカーさんも来日さ

れましたので、私はお二人に会いに行つてその許可をいただきました。

その時私は年来の疑問をヘッカーさんにぶつけてみました。旧東ドイツでマルクス・エンゲルスの著作集や全集に携わっていたマルクス研究者は、東ドイツの警察国家体制に対して疑問を持つていなかったのですか」と質問をしました。

私がそのように尋ねますとヘッカーさんは「自分たちは上の言いなりでやっていただけではない。むしろマルクス学者たちは体制に批判的な人が多かった」と答えられました。私はさらに「それでもソ連の嫌うマルクスの原稿、例えば『19世紀ロシア秘密外交』という論文は東ドイツの出版物からはオミットされていたではないか」というと、何を入れるか何を除外するかは上が決めたが、それを経た後は自分たちは良心的にやった」という回答です。私はさらに「刊行された『全集』でも注釈とか序文は政治的立場で書かれているのではないか」といいますと「確かにそうだ。しかし、それは読み飛ばせばいいんだ。」と答えられたので、このくらいで止めておくことにしました。

ヘッカーさんは1953年生まれですが、旧東ドイ

ツのマルクス研究者、とくにその中で比較的若い世代が体制に批判的であったのは、そのとおりだろうと思います。それでも、二つの政党の下での「HENGGA」には政治的影響や限界があったわけで、それに対して「非政治化」という原則が立てられたわけです。

それではマルクス学はまったく非政治的なのかということですが、そう言いきるわけにもいきません。マルクス学というのは変革、革命の理論を研究しているのですから本質的な意味では政治的です。ただ、それぞれの政党や政権によって影響されるべきではないと思います。過去のマルクス学の問題はナチス等による迫害だけでなく、内部における政治との結びつき、河上肇がマルクス学に入る時期におきたマルクス主義の変化に影響されていたと思います。以上が前置きです。

## 2. マルクス学の成立ーロシア革命・ドイツ革命の前と後

マルクス学は1917年から1919年にかけてのロシア革命と第一次大戦後のドイツの革命の前と後の時期に成立しています。あまり知られていないのはマ

ルクスの全集の最初の企画が生まれたのはウィーンで1911年頃であったということです。

1883年にマルクスが亡くなりましたが、この当時の著作権は30年でしたから、没後30年の1913年になるとマルクスの著作は誰でも出版してもいいということになるので、それに対する対応を当時のマルクス主義者が相談の会を持ちました。その中でマルクスの全集の企画が生まれたようです。

これはランカウという人が明らかにしたことですが、1911年から12年のころウィーンでオーストリアのマルクス主義者たち、マックス・アドラー、オットー・バウアー、アドルフ・ブラウン、ルドルフ・ヒルファアーディンク、カール・レンナー、ロシア人のリヤザノフが参加してそのような企画を立てました。

彼らは以下のような編集の原則を決めていました。あらゆる学問的要求に答えるような、絶対的に完全に系統的に配列され、草稿や各版と対照可能になったマルクス全集を序論と包括的な注釈をつけて刊行する。<sup>1</sup>

それまではマルクスの種々の著作がばらばらな形で出版されていました。少しまとまった形でマルクス

の著作を出版したのがフランツ・メーリング  
1846-1919)で、『マルクス・エンゲルス・ラッサール遺稿集』を1902年に刊行しています。

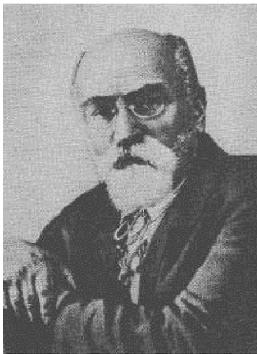
『マルクス・エンゲルス全集』が出版される以前にはこのメーリングの『遺稿集』がよく使われたようです。『ドイツ人問題』とか『ヘーゲル国法論批判』とかの初期マルクスの著作が読まれるようになったのはメーリングの『マルクス遺稿集』によつてです。この企画が出るまでは、マルクスに興味を持つ人やドイツ社会民主党などの社会主義政党が政治的なパンフレットとして使いやすいものを出版するというのがほとんどで、系統的な著作を出版するという考え方はありませんでした。

しかし『全集』の相談を受けたメーリングとドイツ出版社が反対し、ドイツ社会民主党の財政を担当していたエックシユタインも、当時最高の権威であったカウツキーも動きませんでした。エックシユタインは「そういう出版は学者先生は喜ぶかもしれないが、ほとんどお飾り目的の企画で、実際の政党の政治運動には役に立たない。社会民主党としては協力できない」とと揶揄しています。しかし、ロシアから亡命してきて

いたリヤザノフという若者 David Borisovich Rjazanov=Goldendachn 1870-1938)が、ウイーンでの合に加わっていました。この人はこの企画をあきらめず、カウツキーやベルンシユタイン、ラファルグ夫妻と連絡しながら文献資料収集の活動を続けました。

彼はいくつかの論文も書いていましたので、ロシア革命以前からヨーロッパでは「マルクス学者」としてマルクスのことならリヤザノフに聞け」といわれるくらいで、全集企画にかかわった人たちのあいだでも「冗談半分に、もし社会民主党が政権をとったら赤色大学の教授だな」と言われていました。

この人は1917年ロシア革命が起きるとロシアに帰国し、政治活動に参加しレーニンと出会いますが、レーニンはリヤザノフを信頼し、1921年1月にマ



リヤザノフ

ルクス・エンゲルス研究所の所長に任命して年来の夢であるマルクス・エンゲルス全集の企画を進めるように激励します。しかし、リヤザノ

フがこの企画を実現するにはドイツ人の協力が必要でした。と言いますのは、マルクスの草稿の大部分はドイツ社会民主党本部のアーカイブのなかに保存されていました。ですからドイツ社会民主党とソ連の共産党の間を取り持つ人がいなければこの企画は実現できませんでした。そのドイツ側の協力者がフランクフルト大学 附置 社会研究所 Institut für Sozialforschung) を設立したグループでした。

この研究所がいわゆる フランクフルト学派「哲学の拠点となるのは1929年に哲学者ホルクハイマーが所長になってからですが、それまでは 社会研究所」という名称は、ネツツプの言葉」で、マルクス研究所」というのが本来の設立の意図でした。

この設立グループが1923年5月にチ ユーリングンのゲラベルクのホテルで「マルクス主義研究週間」という合宿セミナーを開催しました。そのときにマルクス主義研究の組織問題も議題になりました。参加者は写真にもありますが、ワイル、ポロツク、コルシユルカーチ、ゾルゲ、アレクサンダー、ツエトキン、ウイットフォード、フオガラシ、グンペルツ、ロニンガー、ジュースキント、フランク、シミュニク、マ



ツシングで、この写真を撮ったのは当時ドイツに留学していた福本和夫でした。

このグループが翌年に設立したのがフランクフルト社会研究所でした。

この研究所は創立者フェーリックス・ワイルが親友フリードリッヒ・ポロツクとともに運営し、初

代所長は 社会主義と労働運動の歴史論叢」を出していたカール・グリュンベルクです。写真左。彼は社会主義とか労働運動に興味を持っていた歴史家・経済史家です。このグループが「マルクス・エンゲルス全集」をドイツ側で支えた人たちです。



このグリュンベルクという人はリヤザノフがウイーン大学に顔を出していた時の先生です。リヤザノフはグリュンベルクの線で、フランクフル

ト社会研究所と手を結べば自分の企画が実現できるだろうと目をつけたわけです。

1924年8月に、リヤザノフが所長を勤めるモスクワのマルクス・エンゲルス研究所とフランクフルト社会研究所に協働の合意ができます。フランクフルト社会研究所の地下に写真現像センターを造って、ベルリンの社会民主党本部アーカイブにあるマルクス手稿を写真撮影し、ベルリンのソ連大使館を経てモスクワのマルクス・エンゲルス研究所に輸送しました。それによってベルリンにあった資料のほとんどのコピーをリヤザノフの研究所が入手することができました。これが『マルクス・エンゲルス全集』の元になった資料です。

なお、この時ベルリンの社会民主党の側にあつて『全集』の刊行に理解を示して協力を可能にしたのは、かつてウィーンでマルクス全集の最初の企画をしたグループの中にいたアドルフ・ブラウンとヒルファーディングでした。

また、この二つの研究所は、ドイツ語で出版をするためにフランクフルトにマルクス・エンゲルス・アルヒーフ出版社を設立し、『マルクス・エンゲルス・アル

ヒーフ』という研究雑誌と『マルクス・エンゲルス全集』のドイツ語版の出版のため協働することに合意しました。『マルクス・エンゲルス全集』はレーニンがリヤザノフを信頼してスタートしたのですが、コミンテルンもそれを支持して1924年の第4回大会でこの事業をすすめることを決議しています。

ですから『マルクス・エンゲルス全集』はコミンテルンの出版事業だと思われることもありましたが、しかし、全集に協力したドイツ人たちがどういった形でモスクワに行ったのかというと、その多くはドイツの党とソ連の党の間での合意で行ったのではなく、実質的にはワイルやグリュンベルクの推薦で行っていたことがわかります。ですから表面上はコミンテルンが支持しているが、実質的には二つの研究所が協同して取組んだ学術的な企画であつたという二重の構造が分かります。

このグループのなかで、アレクサンダーやシュミュクレ、ルカーチなど多くの人たちがモスクワの研究所で働いていました。このマルクス・エンゲルス研究所の陣容は多様で、所長のリヤザノフも副所長のツェーベル（ハンガリー人 非党員専門家）もロシア革命以

前からの社会主義者で社会民主主義的な思想を残して  
いました。資料収集に抜群の才能を発揮したボリス・  
ニコラエフスキーというマルクス学者や経済部長のニ  
コライ・ルービンはメンシクヴィキでした。ルービンは  
メンシクヴィキの中央委員でした。リヤザノフはレ  
ーニンとの親交関係がありましたから、彼をかばいな  
がら仕事をすすめていたのです。

### 3. 第二次 『マルクス・エンゲルス全集』の苦難

しかし、空集出版は非常に遅れました。1927  
年によりやく最初の巻を刊行しましたが、そのあとは  
1929年に2冊、1930年に3冊というスピード  
でした。私はワイルの自伝の草稿を読みました。彼は  
その中で、自分は催促に行ったが、リヤザノフはでき  
ているものを出版しようとしなかった。リヤザノフは、  
出版したら自分たちはもはや用済みで消されるのでは  
ないか」と何かを恐れていたと書いています。

二つの研究所の関係も1928年に断絶します。公  
式の説明ではソ連とドイツの2つの政党間の対立が激  
化したということになっていますが、ワイルの見解で

は、フランクフルトの研究所で全集の作業をしている  
グループの中に異端派・反対派、クルシニ派、トロツ  
キー派が紛れ込んでいると警戒を強めたモスクワが  
このプロジェクトをストップしたということですが、  
おそらくそんなところだったのではないかと思います。  
この時期1928年から31年にかけて背景に何  
がおきていたかという、スターリン政治体制の成立  
があります。1924年にスターリンが『レーニン主  
義の基礎』を書き、これが権威付けられ多くの反対派  
が次々と排除されます。

1929年にスターリンが「文化革命」をいい出し  
ますが、これを「偉大な転換の年」として第一次五カ  
年計画の強行がはじまります。これを背景として『マ  
ルクス・エンゲルス全集』のプロジェクトが大きな圧  
力にさらされ、メンシクヴィキなどの背景を持っていた  
人たちが排除されます。1931年、リヤザノフが失  
脚し、一時釈放されますが、1938年に銃殺されま  
した。後任の所長はアドラツキ (1878-1945) で、この  
人はレーニン主義研究所の所長でしたからマルクス・  
エンゲルス研究所は合体して、マルクス・エンゲルス・  
レーニン研究所になりました。

『マルクス・エンゲルス全集』は1931年以降、10冊刊行されていますが、1931年3月には職員身元調査と尋問があり、243名中131名が解雇されました。新しいメンバーが政治的審査のうえでリクルートされましたが、その人たちも解雇・追放の憂き目にあうか、1938年の大量粛清の犠牲になるか、スペイン戦線に半強制的に志願させられるか、最後は最前線のスターリングラードの戦闘に投入されて、多くの人が亡くなるという痛ましい結果をたどりました。

当時西側にいたニコラエフスキー、ハンス・シユタインなどは、アムステルダム国際社会史研究所 (ICSS) に職を求めて、そこに自分たちが集めたマルクス関係の資料を保存しました。1938年、ドイツ社会民主党保有のマルクス・エンゲルスのすべての遺稿はアムステルダム国際社会史研究所に売却されていました。彼らによってその資料の整理・研究が細々と続けられました。

#### 4. 日本とのかかわり

さきほどフランクフルトのグループの会合での写真をとったのが福本和夫だという話をしましたが、この

研究所を創る時のアイデアがどこから出たのかというと、どうも日本の大原社会問題研究所がヒントになったらしいということがわかりました。ワイルの自伝草稿を読むと研究所開設者のワイルにポロックが日本でできた研究所の話をして、フランクフルトでもそのような名前を付けなければならないことになったようです。ご存知のように、大原孫三郎が社会問題を研究する研究所を創ろうとした時、最初に所長になってほしかったのは河上肇でしたが、彼は断って東大の高野岩三郎（写真）を推薦して高野が所長になりました。



大原社研は第一次大戦直後のこの当時、ドイツに本を買い付けるために久留間鮫造や榎田民蔵を派遣しています。大内兵衛や宇野弘蔵なども大原社研の研究者としてドイツで研究しました。私はこの人たちがフランクフルト研究所の人たちと接触したのかと思って調べましたが、そうした形跡はありません。大原社研がこの全集プロジェクトと結びつきができたのは、高野岩三郎が1927年に欧州を旅行した際にベルリンでリヤザ

ノフに会って、その招きでモスクワの研究所を訪問し  
てからです。

高野はリヤザノフと親交を結び、モスクワでマルクスの文献の研究が行われていることを知って非常に興味を持ちました。彼はこの当時、ある辞典のなかで、世界に社会問題を研究する3つの研究所があるが、それはモスクワとフランクフルト、それに日本の大原社研だ。大原社研はモスクワの研究所ほど大きくはないけれど、東洋でそれを支える」と抱負を語っています。

モスクワの研究所の最大のプロジェクトは『マルクス・エンゲルス全集』ですから、大原社研はこの問題に関わるようになります。1927-29年に『マルクス・エンゲルス全集』が出たことを背景に日本でもこの全集を出版しようという動きがおきます。最初にこれを手がけたのは改造社(写真上)ですが、改造社がリーダーに据えたのがブレントナーのもとで学んだ旧東京商大現(一橋大学)福田徳三です。

彼はドイツ語がよく出来ましたし、1925年にケインズと一緒にモスクワの国際学大会に出席したことがあってソ連の要人とも顔見知りになっていました。日本のマルクス主義者以上にマルクスを読んでいた学者です。改造社版の企画に対して連盟版 同人社、弘文堂、希望閣、岩波書店、叢文閣の全集企画が浮上します。この連盟版の企画に岩波を引きこむために河上肇が動いて、岩波茂雄に会って説得しています。その岩波が高野岩三郎に「手伝ってくれ」と依頼して高野が協力を約束します。

問題はリヤザノフをどちらが引き込むのかということでした。1928年6月18日、リヤザノフは高野宛の電報で「貴殿ハイズレノ『マルクス・エンゲルス全集』ヲ支持シ、編集セラレルカ?」と電報で尋ねていますが、それに対して高野は大原研究所ソノモノ、ソシテ研究所ノ所長デアル私ハ、改造社版デハナク連盟版ヲ支持シ編集スル」返信しています。リヤザノフから「私ハ連盟版ヲオーソライズスル」と言質を得ています。

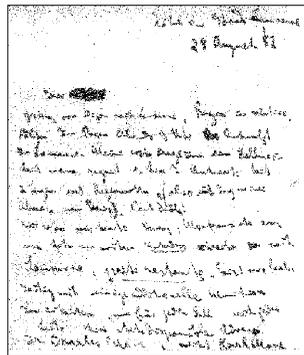
ところが、連盟版は5社の寄せ集めで、編集陣も沢山の人を並べすぎたので結局流産します。先に改造社

版の方が進んでいたにもかかわらず、それを追い越すというところで連盟版が企画されたことが無理だったと思います。5社のうち、同人社、希望閣、叢文閣は当時の共産党の影響下にある出版社です。これに弘文堂と岩波書店を引き入れて、党の実質的出版の全集にしようという考えがあつて、それに従つて河上が行動したのではないかと思われまふ。

これについては、モスクワで発見された河上のリヤザノフ宛て書簡では、連盟版挫折の理由の一つとして「高野と大原社研が共同歩調のとれない 社会民主主義者」になつてしまつたと書いています。リヤザノフはレーニンと自分は対等だと考えている世代であり、社会民主的な考えを残していましたが、高野とは近い立場にあつたと思われまふ。それに対して河上は当時のコミンテルンの「社会民主主義者は社会ファシストである」といった規定に従つて行動したのでしよう。この点で河上の行動には、学問的出版の実現を目標とした高野やリヤザノフとは相容れない視点があつたといえます。

河上、あるいは河上にかかわりのある人が『マルクス・エンゲルス全集』に協力した事例としては、京大

が所蔵しているマルクス発エンゲルス宛て書簡 1882年8月24日付け 写真が大原社研の高野を通じて京大からモスクワに送り、旧MEGA第3部門第4巻(1931)に収録されたことをあげることをあげることができるでしょう。京大は1894年12月6日エ



ンゲルス書簡も持つていて、これは全集が挫折したために収録されていませんが、1963年になつてMEGA第22巻でようやく公表されました。このように日本にある資料の提供は大原社研を通じて京大、河上グループの人たちの貢献で行われています。このように、大原社研や河上が1920年代モスクワを中心としたマルクス学の政治的影響を受けていることを理解することができます。

## 5. 新MEGAを支えるネットワーク

現在は新MEGAの企画が進行していますが、国際化さ

れた中での最大の貢献の一つは日本のマルクス学者たちによるものです。フランス、アメリカ、イギリスの学者も協力していますが、とくに第2部については国際化という点でロシアとベルリンのグループだけでなく日本のマルクス経済学者が加わったことではじめて完結することができました。

具体的には法政大学の大谷禎文氏、東北大学大村泉氏、首都大学東京の宮川彰氏、大東文化大学の竹永進氏らが参加して、特に第11、12、13巻を10年くらいの間協同作業をされてそれらの巻を完成されました。現在はさらに第IV部17、18、19巻、マルクスの残した抜粋ノート、メモ、覚え書きの編集・刊行作業が日本の担当になっています。ベルリンでの会合はアカデミックな会合でマルクス主義者はゲスト参加者以外はほとんどいませんでした。ですから私はこの貢献は当事者達より、私のような外部の人間が紹介した方が適当であろうと考えてベルリンの会議で取り上げたわけです。

最後にマルクス学が国際政治といわば斜めに交錯していたことを示す人物として、リヒアルト・ゾルゲ

1693-1944)を取り上げておきましょう。先ほどお話ししたフランクフルトのグループの会合の事務局として会合の通知を出したのはゾルゲです。ゾルゲはフランクフルトの研究所の助手であった後、リヤザノフと出会って全集の仕事をやらないかと誘われています。

しかし彼は諜報機関の仕事をするためにソ連共産党に党籍を移しました。一緒にモスクワに渡った妻クリステイアーネはリヤザノフの研究所で働いていましたが後に離婚します。モスクワで高野をリヤザノフの研究所に案内したのもゾルゲでした。

彼は日本にも関心を持っていて日本の帝国主義について優れた論文を書いています。私は最初ゾルゲはスターリン派かと思っていました。私は最初ゾルゲはハリー派として、彼自身粛清の怖れをひしひしと感じていたようです。それでコミンテルンから離れて赤軍情報部に所属替えして、外地での仕事を希望し、上海から



日本に來たようです。ゾルゲやワイルたちの流れにマルクス学のもっていた危なさが政治と學術の緊張が



**MEGA² I/1 (1975)**



**MEGA² II/12 (2005)**

あつたのではないかというのが20世紀のマルクス学を追いかけた私の感想です。  
 私は河上肇文庫の中にマルクス・エンゲルス全集があれば、河上が書き込みや感想を残しているのではないかと思つたのですが、目録の中にはありませんでした。河上が東京に持っていった文献の多くが押収されていますからおそらくその中に入っていたのではないかと思つています。

〔**典拠**について：最初マルクス全集の企画については、Götz Langkau, “Marx – Gesamtausgabe – **Dringendes** Parteiinteresse oder dekorativer Zweck?” International Review of Social History 28(1)に拠っています。旧MEGA『マルクス＝エンゲルス全集』については、ハンブルクのArgument出版社から刊行されている『マルクス＝エンゲルス研究論集新シリーズ』(Beiträge zur Marx-Engels-Forschung Neue Folge)およびその『特集版』SonderbandにRolf Heckerさんが公表した諸論文、および大村泉さんが『大原社会問題研究所雑誌』の559号と617号に掲載した論文に多くを負っています。的場昭弘さんの『未完のマルクス—全集プロジェクトと20世紀』(平凡社、2002年)も、この講演のテーマについての有益なガイドとしてあげておかなければなりません、Heckerさんと大村さんの調査による補充が必要です。〕